説教20200621フィリピ1：12-21　258 259 400

「獄中のわたし」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　先週、熊本草葉町教会から嬉しいお手紙を頂きました。どんな手紙かと申しますと「お祝いの言葉　別府不老町教会の皆様、尾崎二郎先生　とはじまり　准允式おめでとうございます。」で終わる祝福のお手紙でした。私たちはこのような言葉の一つ一つによって建て上げられていきます。イエス様は「人はパンだけで生きる者ではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と言われましたが、それは、聖書に書かれてある御言葉ということだけではありません。私たちが日常に発する言葉一つ一つにも御言葉が宿っています。主なる神は私たちの言葉を用いて、御言葉を伝えようとされているのです。ですから、私たちは注意して、お互いが建て上げていかれるような言葉を用いていかなくてはなりません。

　ともあれ、このタイミングで准允式の祝福が聞かれるのは本当に幸いなことでした。熊本草葉町教会と個人的なつながりがある方もいらっしゃるかもしれませんが、仮に世間的な言葉を用いれば、私たちは得てしてこんな風に考えてしまいがちです。「熊本草葉町教会は熊本バンドの流れだし内とも交流がないので縁がない」などと考えてしまうこともあるでしょう。しかし実はそのように今は関係が薄いからこそ、御言葉によって建て上げられていく関係もあるのだと私は思います。

　さて、パウロの手紙はそういう意味では、私たちを建て上げていく言葉以外の何物でもありません。パウロがものすごい勢いでそのような手紙を各教会、すなわちローマ、コリント、ガラテア、フィリピ、テサロニケ、フィレモンの教会に送り続けることができたのは、彼が情熱家であったからではありません。彼がこのように継続的に手紙を送り続けられたのは、彼が**打ち砕かれた人**だったからでありましょう。例えば、パウロはコリント教会を追い出されるようにして後にしました。しかし、後年、彼はそのコリント教会に対して、建て上げる手紙を送ることができました。このようなことは打ち砕かれた人でなければできないことです。分かりやすく言えば、もし、あなたが大好きな人にラブレターを送って、その思いが受け入れられず失恋して絶望した時に、あなたは打ち砕かれるでしょう。その時あなたはイエス様に助けを求めることができれば幸いです。

　今日の招きの言葉でも語られましたように、主なる神は決して、あなたの打ち砕かれ悔いる心をあなどられることはないのです。

　では、パウロはどのようにして打ち砕かれた人になったのでしょうか。それは使徒言行録に３回出て来る、パウロの回心の記事を読めばよく分かります。今日はその内の第１番目の９章からの記事を見ていきたいと思います。新約聖書２２９ページになりますが、９章１節からお読みします。「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺害しようと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった」パウロは回心前はこのようにサウロと呼ばれておりました。この文章を読むだけでゾットするようなことをサウロはキリスト教会に対してしていたのです。この道に従う者というのはクリスチャンのことを指しています。サウロはクリスチャンを縛り上げて連行しようとしてダマスコという町に乗り込もうとしています。しかも、大祭司のお墨付きをもらうために、手紙まで添えてもらったというのです。その内容は、当然、サウロがやっていることを正当化ししかも励ますような内容だったことでしょう。実に恐ろしいことです。しかしもっと恐ろしいのは、このファリサイ派の仲間の中で誰も自分たちのやっていることの罪に気づいていないということです。

　ファリサイ派はイエス様を殺そうとして付け狙っていた時から、この時までずっと変わらず、執拗にイエス様そして教会を亡き者にしようとして頑張って来たのでした。彼らはそのような組織を構築していたといってもよいでしょう。サウロは**自分が**、そして**自分たち**が救われようと思って必死でした。そんな彼には、クリスチャンはただ自分たちの秩序を打ち壊す者たち、としてしか彼の目には映らなかったのです。

　そのようなサウロを打ち砕けるのはもはやイエス様御自身しかいなかったのかも知れません。サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らし、サウロは地に倒されました。それからイエス様とサウロとは次のような応答をいたします。「サウル、サウル、なぜ私を迫害するのか」「主よ、あなたはどなたですか」「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」この**起きて**町に入れの、**起きて**ということについては、イースターの時の説教でお話しました、ペトロが**立ち上がって**イエス様が葬られた墓へ走り出した時のことを思い出して下さい。ペトロは立ち上がって走り出しましたが、この立ち上がってについて、ご説明したと思います。立ち上がるというのは、復活するという意味のギリシャ語アニステーミという語が使われていて、より正確に訳せば、ペテロは立ち上がらせ られたのです。つまりペトロは主によって立ち上がらせ られるという、徹底的に受身の経験をしたのでした。サウルも同様です。イエス様から「起きて町に入れ」という命令を受けて、サウロは立ち上がらせ られて、町に入れられて、そしてなすべきことを知らされたのでした。

　ここにサウロが完全に主によって打ち砕かれ主に従うものと替えられた姿が如実に示されています。私たちが経て来た回心も、まさに人それぞれで、ここまで鮮明な回心は経験しなかったと思われる方もおられるかも知れません。しかし、回心というのは必ずしもこのような明快な一発によって成し遂げられるとは限らないでしょう。現に神学校でも、自分の回心を明快に語れる人の方が稀でした。しかし多かれ少なかれ、回心には、自らが打ち砕かれて、それまで自分が拠り所としてきた価値観や関係性、あるいは愛情などを手放させ られたということは伴っていると思います。

　サウロは今や、わたし或いは私たちの救いを求める者から、キリストの救いを求める者へと変えられ、名前もパウロと変えられました。パウロは自分の思いや自分の願望の先に救いがあるのではなく、救いがイエス様御自身**から**やってきて、自分がイエス様の者となって救われるのだということを、悟らされたのでした。

監獄の中のパウロは、もし以前のサウロのままならば絶望していたかも知れません。しかしパウロは逆でした。物理的に隔離されていようが、キリストの命を生きるパウロには次々に救いの手が差し伸べられました。１３節で、「私が監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他すべての人々に知れ渡った」、とパウロは記しています。つまり、隔離されることによって、ますます、キリストの命を生きるパウロは有名になって、

皆が彼のことを知るところとなったのでした。パウロは牢獄の中ででも喜んでいます。それはあらゆる場所でますますキリストの名がほめたたえられているからです。多くの兄弟姉妹は、獄中でもパウロが救われていることを知って、ますます確信して、恐れることなく、イエス様の救いの御言葉を語るようにされました。語らないではおられなかったのでしょう。しかし中には、妬みと争いの念に駆られて、キリストを宣べ伝える者もいた、とパウロは言います。彼らは、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機から、キリストを宣べ伝えるといいます。パウロは具体的にそのようにしている人のことを云っているのですが、具体的にそのような人のことが書かれてはいないので詳細は分かりませんが、なんとなく人間の悪い部分が働いているのだなくらいは推察できます。しかし、主なる神は人のそのような悪をも含めてすべてのことを相働かせ、益となさしめることがお出来になられます。そのことをパウロは獄中にいて実際に証ししているのです。

　パウロは喜んでいます。そしてこれからも喜びます。パウロのまなざしはひたすら、先にあるキリストに向けられています。

１９節からパウロは、あなた方の祈りが、いかに私の救いになるのかを切々と、そして感謝を込めて記しています。獄中に監禁されているパウロは、今、この時にでも死ぬことがあることが分かっていました。しかしパウロにとって、生きること死ぬことの問題以上に、キリストがみんなに公然とあがめられるようになることを求めていたのです。そして、今、獄中にいる自分が用いられて、ますます、キリストがほめたたえられていることを喜んでいるのです。

２１節は、獄中でパウロが自分自身のことを突き詰めて考えて、そして手紙に記した重要な箇所だと思います。「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」ここで、パウロは究極的な、**私の**救いについて語っています。私たちも、自らを省みて自分ひとりの**わたしの**救いに思いを致すならば、このように思われるかも知れません。しかし私たちは、キリストの救いが本来、**わたしの**救いに留まらず、私たちの救いへと至ることであることにも目を向ける必要があります。パウロもこの続きの節からいよいよその**私たちの**救いについて語りはじめますが、そのことについては２週間後の主日説教で語りたいと思います。

　又、**私たちの**救いということについては、４月５日の受難節での説教で「私たちの救い」という題で説教させて頂きましたので振り返ってみたいと思います。十字架に架けられたイエス様の周りには、民衆、嘆き悲しむ婦人たち、犯罪人、議員、祭司長、ローマの兵士など過越祭の最中でもあり多くの人達が集められました。しかし、ほとんどの人がイエス様の服を分け合い、イエス様をあざ笑い、侮辱し傷つけました。ここに私たちの罪が現れています。そして昼の１２時に太陽は光を失い、全地は暗くなりました。それは午後３時まで続き、その間にイエス様は「父よ、私の霊を御手にゆだねます」と叫び、息を引き取りました。同時に、エルサレムにあった神殿の垂れ幕が真ん中から裂けたのです。これは、イエス様が我が身を引き裂いて、我が身を打ち砕かれて、**私たちのために**神の国への門を開いてくださった出来事でした。ここに**私から**始まる**私たちの救い**ではなく、主イエス・キリスト様から来きたる**私たちの救い**が示されています。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父なる神様、今日ここに兄弟姉妹たちとともにあなたを賛美出来ますことに感謝いたします。今日私たちはパウロから、キリストにあるわたしの救いについて知らされました。パウロが獄中でも喜んでいられたのは、あなたが共にいて下さったからです。どうか今私たち一人一人を顧みて、一人一人をそのような救いにあずからせて下さいますように。今、世界中が同じように、計り知れない孤独と不安におびえています。どうかあなたが一人一人をその愛で満たして下さい。

　私たちをあなたの愛の証し人としてください。あなたの愛の喜びがますます広く告げ知らされて、計り知れない喜びで私たちを満たして下さい。召されても、この世にあっても、あなたからの喜びはいつまでも変わることがありません。そのことを、私たちが大胆に語っていくことができるようにしてください。父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配されています、私たちの救い主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。